

ものがたり

慈濟

能登半島地震 復興の道





● 扉の言葉 文・證嚴法師 訳・濟運 撮影・黄筱哲

気づき、行動し、成し遂げる

苦を見て福を知れば、

善の念を呼び起こすことができ、

人を助けて苦を取り除きながら、

生きていけるようになります。

学びに限りと終わりはなく、身で以て実践し、

着実に行動して成し遂げれば、

悟りへの道が見え、成仏へと道が開けます。



慈濟日本サイト

目次

【編集者の言葉】
佛の恩に浴し、自分の心を清める
慈願／訳 4

【グローバル慈善】

日本

能登半島地震 復興の道
濟運／訳 8

インド

あれから元気でしたか
林欣怡／訳 30

【今月の特集】

0403 台湾花蓮地震で損壊した家屋を修繕

高雄外国語チーム日本語組／訳 36

專業ボランティアが結集、安全な住まいのために

表紙



石川県の北西部に位置する有名な輪島市白米千枚田は、元日の強い地震で被害を受け、千枚の棚田のうち、八割に亀裂が入るか、土砂で押し潰された。六月の強い日ざしの下で、農家の人々は田植えを済ませた田で草むしりをしていた。現地では農業が復興の道を歩んでいることの象徴だ。(撮影・林玲俐)

【人品の典範】〜仁者・杜俊元〜
無我夢中で引き受ける
惟明／訳 54

【證嚴法師のお諭し】

悪念を消して善念を増やし、良縁を結ぼう
慈願／訳 62

【農禪・生活】

食卓の新たな主役はオクラ
何慧純／訳 68

【特集】食・農・教育

各 クラスの食べ残しは 120 グラム
御山凜／訳 72

一株の野菜の誕生
葉美娥／訳 90

【行脚の軌跡】

慈濟はこうやって発展してきた
濟運／訳 100

七月の出来事
濟運／訳 106

佛の恩に浴し、自分の心を清める

去りゆく春から立夏を迎え、猛暑と豪雨が交差する中、一年一回の「灌仏会」を迎えた。西洋の賑やかな「クリスマス」パーティーに対して、仏誕節は厳かな「灌仏会」で感謝を表し、覚者が人間（じんかん）に降臨して修行を経て悟りを開き、説法したことを記念する。そして、慈済は母の日と世界慈済デーを合わせ、「三節一体」の祝福会を行っている。

この日、カーネーションの香りか灌仏会の法の香りに関わらず、「感謝」を三節一体の中心に据え、仏恩、父母の恩、衆生の恩、天地の恩の全てに対して敬意を払い、敬虔な気持ちを新たにす。特に今の世は天災人禍が頻発しているので、灌仏会という式典を通じ、いつもと変わら

ない敬虔な心で以て、世界を平安の回帰に導くよう訴えている。

多くの仏教施設では、仏像に香湯を掛ける前に《浴佛偈》を唱え、同時に柄杓を用いてシッタールタ王子の肩に香湯を掛ける。これは、自らの心を潔め、「貪、嗔、癡」からもたらされる無明の塵から遠ざかることを意味している。慈済の場合は少し異なっていて、「礼仏足」、「法の香りを受ける」、「吉祥、祝福」という儀の流れに従って自分の心身を清めるのである。その実、仏は元々清浄なものになぜ沐浴が必要かという点、灌仏とは己の心にある仏性を祝福するためだからだ。

敬虔で清浄な心であれば、日々が仏の誕生日なのである。普段から絶えず法水で心を清め、清浄な本性を高めて日々善行を行うよう発心し、常に善念を持ち、あらゆる衆生に対して仏のように敬うことこそが灌仏

能登半島地震 復興の道

石川県北部に位置し、日本海に向かって突き出している能登半島は、豊かで美しい自然に囲まれている。

有名な輪島市白米千枚田は、元日の強い地震で被害を受け、千枚の棚田のうち、八割に亀裂が入るか、土砂で押し潰された。

六月の強い日ざしの下で、農家の人々は田植えを済ませた田で草むしりをしていた。現地では農業が復興の道を歩んでいること象徴だ。



震災から半年、再建を待つ

輪島市町野町の一角にある民家では、六月にバラの花が満開になり、庭はいつものように美しかったが、花を植えた主人はもうここには住めない。震災から半年以上が経っても、水道や電気のインフラ、道路などは復旧中で、輪島市の公式統計によると、全体の再建進度は一割に留まっている。



飛

行機が石川県にある小松空港に降

り立ち、入国手続きを済ませる

と、私たちはその足で輪島市へ向かい、

車で里山街道を進んだ。この道はまる

でリボンのようにくねくねと、能登半

島の北陸地方の海岸線と山間部の間を

縫っているが、被災地に通じる唯一の

道でもある。

一路北へ向かい、左手にはてしない

日本海が広がり、海と空が一つに溶け



込んでいた。山間部に進むと里山の緑が目に入り、山林の間に町や村が点在していた。古民家の黒瓦と白壁が古風で歴史の趣を醸し出していた。四車線の道が二車線になり、さらに交互に通行する片道通行になり、道路事情は益々悪くなった。遠くの青い山は禿げたように土砂が滑り落ちて杉の木が薙ぎ倒されているのが見え、近寄ってみると黒瓦屋根が地面にべったり伏せている家があった。

山河や大地の傷跡を目の当たりにして、證嚴法師の「歩く時は優しく、地面が痛がるから」という言葉の意味がようやく理解できた。

白米千枚田の復興

今年一月一日、能登半島でマグニチュード七・六の強い地震が発生し、甚大な被害を受けた石川県全体で八万棟以上の家屋が損壊した。慈済は石川県の六つの市町村で見舞金を配付した。対象は政府が半壊以上と認定し、且つ六十五歳以上の高齢者が同居している世帯である。五月から七月まで、合計一万一千世帯余りに見舞金が贈られた。

台湾から来た私たちは、六月二十七日に被災地の輪島に到着した後、先ず白米千枚田を訪れた。日本海に面し、自然の

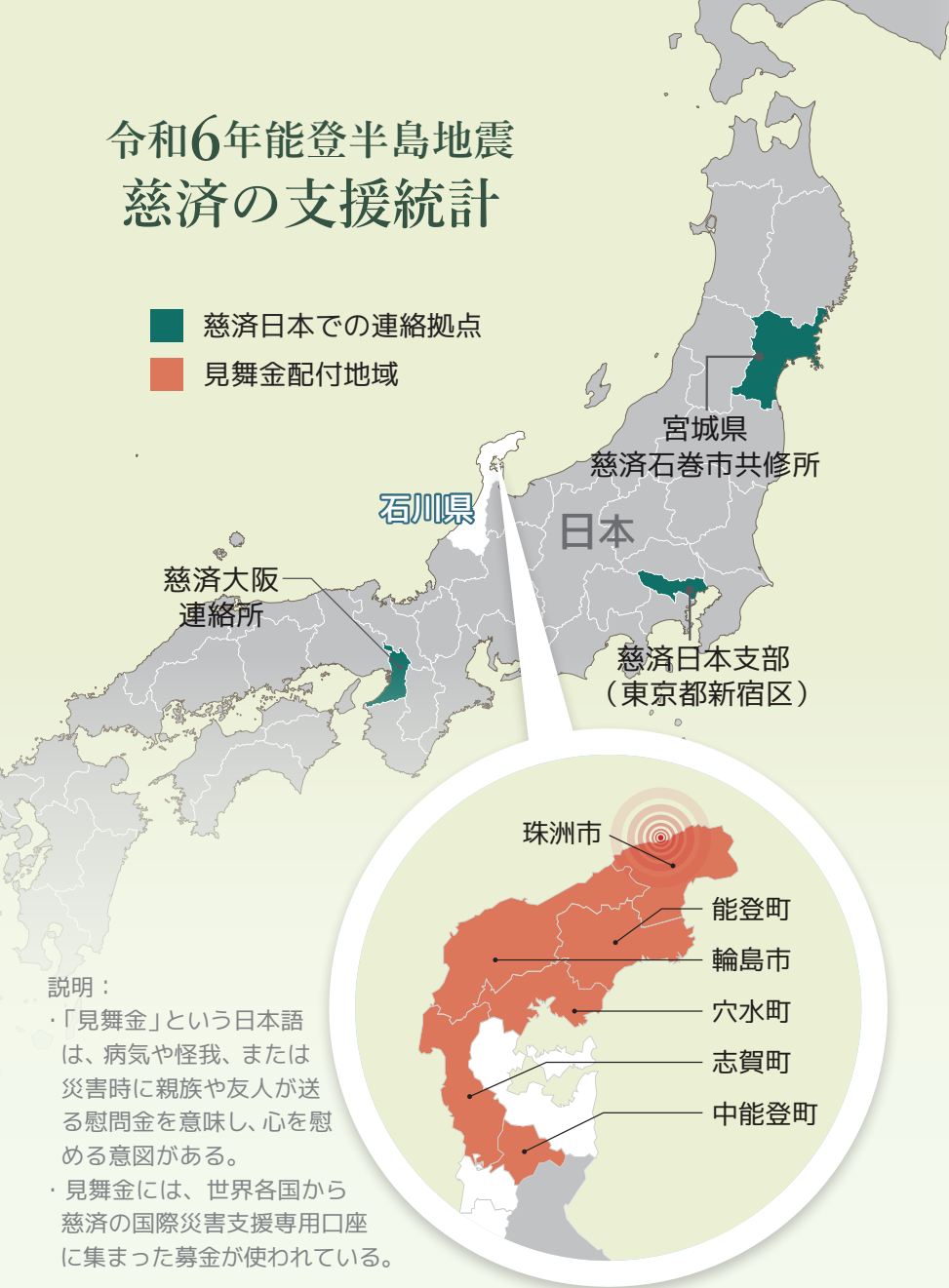
地形に沿って大小合わせて千四枚の棚田が広がっており、世界農業遺産「能登里山里海」の重要な一部を成していた。しかし、地震で八割の棚田に亀裂が入り、最も深いもので一メートルに達していた。海岸沿いの遊歩道は崩れ、上から滑り落ちて来た土砂に埋もれて、元の様子を見ることはできなかった。

千枚田愛耕会の人々は努力して、被害が比較的軽かった水田を修復し、六月中旬までに百二十枚の棚田で田植えを終え

●椎茸農家の高森正治さんは、産業の復興だけでなく、山間部に住む高齢者たちの生活をどのように再建したらいいかを心配している。(撮影・楊景丹)

令和6年能登半島地震 慈済の支援統計

- 慈済日本での連絡拠点
- 見舞金配付地域



説明：

- ・「見舞金」という日本語は、病気や怪我、または災害時に親族や友人が送る慰問金を意味し、心を慰める意図がある。
- ・見舞金には、世界各国から慈済の国際災害支援専用口座に集まった募金が使われている。

災害統計

- ・1月1日午後4時10分、石川県能登半島で強い地震が発生。気象庁によれば、地震の規模はマグニチュード**7.6**、震源地は珠州市近く。
- ・死者**299**人、行方不明者**3**人、損壊家屋**8**万戸、要解体家屋**2**万棟強。6月末の統計によると、解体された住宅は**1千棟**未満で、完成した仮設住宅は**5千戸**。

慈済の支援活動

- ・炊き出し
穴水総合病院及びさわやか交流館ブルートにて、1月13日から3月29日まで二段階で合計**13,097**食を提供。
- ・カフェサービス
穴水総合病院で2月16日より開始し、現在に至る。医療従事者及び被災住民に、無料でジンズーウーロン茶、ホットココア、コーヒーを提供。心を落ち着ける場所になっている。
- ・見舞金の贈呈
6市町村の27会場で**11,302**世帯を対象に、5月17日から7月16日まで四回にわたって実施。
- ・対象
地震によって家が全壊または半壊し、且つ65歳以上の高齢者が同居する世帯。
- ・配付金額
世帯構成に応じて、三段階の金額を設定。1人世帯には13万円、2～3人世帯には15万円、4人以上の世帯には17万円。
- ・助学見舞金
7月17日、金沢市金沢工業大学の学生48人に贈呈。

2024年7月22日の統計

た。今年の総収穫量は百キロに満たないと見込まれており、一粒一粒が貴重な宝なのである。

田んぼで腰をかがめて草むしりをしてきた数人の高齢者たちも、翌朝、輪島市南志見公民館に来て、慈済の見舞金を受け取った。そこは広くて快適で、村人たちにとっては特別な意味を持っていた。震災後、多くの人がそこに避難したのである。公民館の一角には、今でも生活用品や車椅子、便器などが積んである。

午後の配付は町野公民館で行われたが、着く前に道の両側に車がぎっしり止まっているのが見え、見舞金を受け取り

に来た人の列がまるで大きな龍のように続き、頭は見えても尻尾が見えなかった。公民館から五十メートルのところろに廃墟が道を塞いでいた。黒瓦の大屋根は見えても白い壁は見当たらない。全て崩れてしまったのだ。

更に五十メートル進むと、車庫の中で一台の車が押し潰され、永久に出られなくなっていた。近くの廃墟には、食卓だけが無傷で露出していた。地震は新年に発生した。日本の人々にとって一年の中で最も重要な祝日であり、遠くで暮らしている子供たちが帰省して、家族団欒するはずの日だった。その日、輪島市で震



度七を計測し、巨大な地震で輪島市は西に約一・四メートル移動し、地表は約四メートル隆起した。土石流と路面の損壊で、多くの村落が孤立無縁となった。その時この食卓を囲んで新年を祝っていた家族が再び集まる日は、訪れるのだろうか。近くの路地に入ると、美しい生垣に囲まれた裕福な家も、黒瓦と白壁で門前にバラの花が咲き誇る民家も全て、住人が去って空き家になっていた。大きな被害の前では、全ての人が平等なのである。

●能登半島の震災から半年が経過したが、ボランティアたちは何度も輪島市などの被災地を訪れ、公共機関と打ち合わせをして実質的な支援モデルについて模索している。(撮影・陳静慧)

辛抱強く春の再来を待つ

九十二歳の室谷敦子さんは、見舞金を受け取った後、ボランティアが淹れた熱いお茶を受け取り、目頭を赤くした。大阪から来たボランティアの施燕芬（シー・イエンフェン）さんが彼女の手を握って、話に耳を傾けた。

地震発生後、室谷お婆さんはホテルに行き、三カ月間そこで過ごしてから抽選を経て現在の仮住まいに移り住んだ。彼女の家は半壊状態で、今でも業者が来て解体するのを待っている。復興の過程は遠く、厳しいものだが、室谷さんは泣き

言を言うこともなく、希望を失うこともなかった。どんなに苦しくても「我慢」するだけである。

東洋に伝わる文化において、忍耐は一種の美德とされる。日本語の「我慢」には忍耐という意味もあるが、それ以上に自己制御と内心の平静を強調している。これは、日本文化において重視されている内観、自律、情緒管理と深く関係している。「忍耐」であれ「我慢」であれ、挑戦や困難に直面した時、内面的な安定と堅持する精神は保たなければならない。

配付期間中、急に大雨が降り出し、直ぐに止んだので、町野公民館の三階から

外を見ると、近くにある傾いた家や山々が目に飛び込んできた。雨後の山は穏やかで、空は一層青く、田畑はより緑を色濃くしていた。能登半島という場所は四季がはっきりしている。町野の人々は、冬に氷で閉ざされた時にどこにも行けない状態と地震後は同じようなものだと言った。「我慢」し続ければ、春がやってくることをよく知っている。

「絆」の中で再生

被災地では、「絆」という字をよく見かける。これは人と人との深いつながり

と助け合いを強調しており、困難の中で共に努力し励ましあう関係を表す。能登半島は海に囲まれ、人と自然、そして先祖の魂と密接に結びついている。時代が変わり、生活様式が変わっても、人々に受け継がれてきた祭りが、今でも住民の心を繋いでいる。

地域の特色を色濃く表している輪島キリコ会館には、江戸時代と明治時代に作られた約三十基の貴重な工芸品が保存、展示されている。地震の後、職員が会館に入って調査した際、二十基以上のキリコ（灯籠）が倒れているのを見て悲嘆に暮れた。「地震は日常生活を奪っただけ



● 6月28日、輪島市町野町公民館での配付活動中、突然の雨が降り出し、ボランティアたちは迅速に4つのテントを立て、住民が雨宿りできるようにした。また、列の後方にはプラスチックの板の雨よけを準備した。

(撮影・林淑懐)

でなく、能登の魂までも奪うんか」。会館は大きな被害を受け、今も閉館中である。

六月二十九日から二日続けて、慈済は会館の中心建物に繋がった屋外のキリコ担ぎ体験エリアで配付を行った。そこは柱があっても壁がなく、会館の骨組みと接続部分は至る所で亀裂が入り、地面の高低差は三十から五十センチに達し、配付会場は波のように起伏していた。

配付は九時開始の予定だったが、六時にはすでに住民が朝日の下で長蛇の列を作っていた。そのため、開始時間を三十分早め、可能な限り列を日陰になる場所へ移動させた。旭岡晃宏さんと中村倫子

配付エリアで並ぶよう案内すると同時に、足元の高低差に注意するよう促した。

住民に奉仕する現地ボランティアは全て、地震後に出現した力強いサポーターである。坂井さんと船本さんは前々回の配付で見舞金を受け取った住民であり、今回はボランティアとして参加してくれた。相羽利子さんの場合、慈済との縁はもっと早い。二〇一一年の三・一一東日本大震災の後、宮城県で行われた慈済の見舞金配付活動に参加したことがあるのだ。今回は事務所の同僚である和田真太郎さんも誘って参加してくれた。

時間が経つにつれ、太陽はますます直

さんは住民の中でも若いうちに入り、お年寄りに代わって見舞金を受け取りに来ていた。彼らに列の移動の手伝いをお願いすると、自主的にプラカードを作って、住民に並ぶ位置を案内したりして、最後まで手伝ってくれた。そして配付が終わる頃にやっと自分たちの見舞金を受け取った。

「十名さん、こちらへどうぞ」。坂井さんは列の進み具合を見ながら、手を挙げて合図をしていた。船本景子さんは配付順番の案内で、「足元に気をつけてください！」と声をかけた。また、相羽利子さんは一度に十人に、涼しい待合所を離れて

射し、日陰が少なくなっていくが、列はますます長くなり、何度も折り返していた。山下博之さんと和田さんはそれぞれプラカードを持ち、「ここが列の最後尾です。見舞金を受け取るまでに三時間待ちとなっております」と住民に知らせていた。

山下さんは、白米千枚田愛耕会のメンバーで、地震後に田んぼが損壊し、家が崩れ、母親が病気になったにも関わらず、二日間の配付活動に参加した。「台湾や海外からも、私たちが応援してくれているのだと分かりました。私たちにとって前に向かって進む力になっています」と言った。

遠方から心のこもった祝福

塩田正喜さんは漆器「輪島塗」の職人で、見舞金を受け取るときに感謝の気持ちを中国語に翻訳し、自筆で感謝の手紙を書いてボランティアに渡した。そこには次のように書かれていた。「台湾の皆さんの寛大な気持ちに深く感謝いたします。この寄付は復興に使わせていただきます。皆さんもどうか体に気をつけて、幸せにお過ごしください」。

住民の沖崎恵也さんもその場で感謝の手紙を書いた。「慈済の皆さんへ心

から感謝を申し上げます。いただいたお金は大切に使用させていただきます」。最も敬虔な言葉で感謝の気持ちが表されていた。「口頭で伝えるだけでは気持ちが十分に伝わりません。どうしても文字にして慈済ボランティアに手渡さなければ、と思いました」。

二日続けてボランティアをした中村さんの家は、輪島市の朝市通りにあった。地震の後で津波警報が発令されたが、輪島市に津波の大きな被害はなかった。但し、地震によって火災が発生し、朝市周辺の広い地域を焼き尽くしてしまった。中村さんの家も全焼し、今は

仮設住宅に住んでいる。

「地震発生からずっと受け取る側でした。今日ボランティアとして参加してみても、実は支援する側も簡単ではないことがわかりました」。

二日続けてボランティアに参加した人の中に、福井市から来た西口智則さん一家の姿があった。妻の羅婷婷さんは台湾出身で、夫婦は息子の裕郎君をつけて地域住民を支援した。智則さんは、「皆さんが遠くから来られたのは現金を

●慈済ボランティアは6月下旬、輪島市と中能登町で見舞金を配付した。第三回には合計4575世帯に配付した。(撮影・陳文絲)





●白米千枚田愛耕会のメンバーである山下博之さんが、自主的に慈済の配付会場に来てボランティアをした。プラカードを掲げ、列の後方は3時間待ちであることを集まった人に伝えた。(撮影・陳文絲)

配るためだなんて、信じられませんでした」と言った。

現金は大切に扱う必要がある。日本人ボランティアの三田めぐみさんは配付チームを担当した。「私は受け取りに来られた方に『この中には現金が入っています！』と伝えました。すると、とても感動したようで、『今、台湾も大変ですよ。花蓮で地震があったばかりなのに、皆さんがわざわざ日本に来て助けてくれるなんて、本当に感謝しています』と言われました。慈済は一番実用的な現金を配付することで、復興における住民の不安を軽減しています」。

雨が降って、その水面が天の光を映しています」。

見舞金の配付会場ではどこでも、住民たちの涙と笑顔が入り混じった姿が見られ、悲惨な体験を語る声が聞こえていた。日本人でも台湾人でも、配付チームのボランティアの一員として恭しく見舞金を住民に手渡す姿は同じだ。行政チームは任務を厭わず、法縁者ケアチームは寄り添い慰め、また、記録担当や待機、案内などの機能チームの姿もあり、皆でいくつもの任務を兼ねて、互いに補い合い、毎回の配付活動をこなした。

慈済ボランティアは、千枚田愛耕会の

他にも、「この街は見捨てられるんじゃないかと思っていましたが、温かい見舞金を受け取ってからは、積極的に生きていこうと思うようになりました。本当にありがとうございます」と話す住民もいた。

能登の人と田んぼ

午後四時、輪島キリコ会館の屋外での配付活動が終了した時、雨も止んでいたが、地面のくぼみには水が溜まっていた。あるボランティアが言った。

「これ、千枚田のようですね。甘露の人々のように、どんな小さな田でも諦めず、福田を耕して善の種を植える。強靱な能登の人は、先祖に倣い、冬に雪が降ればどこにも行けないので、平穏な時から互いに支え合い、災害が来た時に互いに助け合う。夏が訪れる頃には能登の街に復興が進み、一緒にキリコを担ぐ日が来てほしいものだ。里山里海の恵みに感謝し、災難が無くなることを私たちは切に願った。(慈済月刊六九三期より)」

災害復興と生活再建

能登半島地震被災地支援の記録



サンデープ君 あれから元気でしたか

「サンデープは今では健康に過ごしています。先日のかけっこでは一位になりました。ただ、勉強があまり得意ではないのです。ラージギルを通る時は、いつもサンデープに会いに来て私たちを家族として扱ってくれる、彼を世話してくれた皆さんと證厳法師に感謝しています」。三月末、スマンティ・デヴィさんは、慈済ボランティアが再び訪れたことに驚きと喜びを感じながら、息子サンデープ君の近況を説明した。

二〇二二年、経藏劇を演じる慈済チムが仏陀の故郷の映像を放映した時、證厳法師は、一瞬で過ぎた画像の中の棒のように痩せているのに、太鼓のような大





きなお腹をした子供の姿に目を留めた。忍びない思いを抑えきれず、ボランティアにその子を探してもらった。現地ボランティアの世国さんは、村から村へと探し回った結果、ラージギルの七葉窟がある山の麓でサンディープ君を見つけた。そして、彼に付き添い、治療費も援助した。手術は成功し、彼は他の子供と何ら変わらない少年になった。

現在公立学校に通っているサンディープ君は、ボランティアの手をとって部屋に入り、数字を書いたり、物語を読んだりした。彼が教師になりたいというので、ちゃんと勉強するように、とボランティ

アが励ました。

治療を求めて長距離を移動 肩の荷が下りた

二〇二二年六月、世国さんとブツダガヤボランティア、土楊さんは、入院検査を受けるサンディープ君に付き添った（左上の写真）。台北慈濟病院の趙院長の協力で、小児の泌尿関係の疾患であると診断され、治療方針が示された。七

- ペテランのスージア医師による治療を受けた。（下右）
- 手術によって大量の尿が排出され、一時、腹部がへこんだ状態になった。（下左）

月、二人はサンデーブ君と両親に同行し、千キロ離れたニューデリーにある、インドで最も先進的なアポロ病院へ向かい、ベタランのスージア医師による治療を受けることになった。病状は緊急を要していたので、スージア医師が直ちに排尿手術を行った。手術によってセリットルを超える尿が排出され、一時、腹部がへこんだ状態になった。圧迫されていた内臓は徐々に元の位置に戻ったが、左の腎臓は既に機能を失っていたため、同年八月に再びニューデリーへ行き、摘出手術を受けた。

手術が二回とも成功し、両親はやっと安心することができた。肩の荷が下りたようにサンデーブ君も笑顔を取り戻した。他の子供と同じように駆け回ることができ、色眼鏡で見られることに耐える必要もなくなった。何よりも彼はこれから健康に成長していけるのだ。

（慈済月刊六九〇期より）

●「ラージギルを通る時は、いつもサンデーブに会いに来て私たちを家族として扱ってくれ、彼を世話してくれた皆さんと證嚴法師に感謝しています」と3月末、お母さんのスマンティ・デヴィさんは、慈済ボランティアが再び訪れたことに驚きと喜びを感じながら、感謝した。



「今月の特集」

専門

0403 台湾花蓮地震で
損壊した家屋を修繕

ボランティアが結集

安全な住まいのために

文・慈済真善美記録ボランティア
訳・高雄外国語チーム日本語組

地震で壁にひびが入った鳳林鎮
の古い住宅。80歳の家主が安心
して住めるよう、ボランティア
の左官がモルタルで修理した。
(撮影・陳何嬌)



0403 台湾花蓮地震で、

被災範囲の広さと修繕必要戸数の多さから、業者不足に陥った。

台湾各地から左官、鉄工、ペンキ、水道・電気、木工など

プロのボランティアが、機械や工具を携えて花蓮にやって来た。

そして、プロでないボランティアも集まって、廃棄物の運搬などを手伝い、

皆で力を合わせて、地元住民のために、

安全な住まいを取り戻す手伝いをした。

昨

「夜は花蓮中の人が眠れなかった
と思います……」。花蓮県吉安郷

勝安村の葉さんは、慈済ボランティアが約束通り家の修繕に訪れたのを見て深く感動すると共に、彼らもきつと眠れない一夜を過ごしたに違いないと思

い、心からお礼を述べた。

四月三日のマグニチュード七・二の地震から一カ月間、千三百回を超える余震が続いた。他の地域からやって来た慈済ボランティアは、頻発する余震を体験したことで、家の修繕を待ち望む

被災者の気持ちにいつそう共感を覚えた。そして、安全を確認した後、昨日調査してから、購入した材料と工具で、葉さんの家の三階の床のタイル張りから始めることにした。全く同じタイルが手に入らなかったため、ボランティアは知恵を絞って、浮き上がっただけで割れていないタイルをきれいに剥がし、元の場所にはめ込むことにした。このような丁寧な作業は手間暇が余計に掛かったが、元通りの美しさが保たれ、家主を安心させた。

三階の床面の修理を終えると、翌日は浴室の壁の剥がれたタイルと四階の床

の浮き上がったタイルを修理した。これらを終えた後、ボランティアはふとベランダのタイルもかなり広い範囲で破損していることに気づいた。家主は「あつ、そうなんですか、気づきませんでした」と首をかしげた。その日はかなり雨が降っていたが、ボランティアは工事を中断しようとはせず、キャンバスシートで臨時の雨よけを作り、セメントで床面を平らにした。

その二日間、三階と四階は砂ぼこりが舞い、ドリルやハンマー、研磨機の音と足音で喧しかったが、ようやく終了し、一階のリビングには笑い声や話し

慈濟修繕プロジェクトの統計

情報源

花蓮県政府、慈濟修繕センター

作業手順

修理名簿の作成 → 現場の下見 →
修理同意書へのサイン → 施工 → 工事完了
→ 施工完了確認書へのサイン

修繕項目

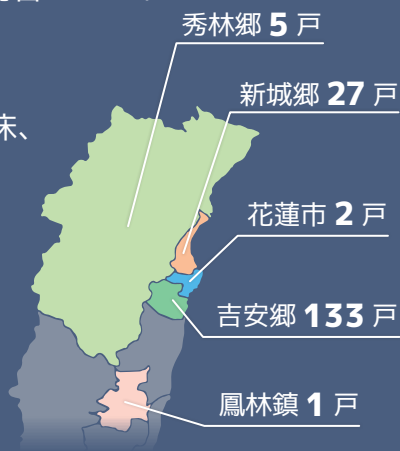
損壊した室内の床、
壁、天井、
塀など

修繕完了

● 計 **168** 戸

職人

台湾各地のボランティア、
延べ動員数 **2,307** 人



2024年5月22日現在の統計

プロが立ち上がった

声が響いた。花蓮慈濟ボランティアの曾金財（ジン・ジンツァイ）さんと呉玉鶴（ウー・ユーホー）さん夫妻は、せっかくなのでと飲み物を持って来てねぎらった。

震災から二週間、葉さんはずっと「職人が見つからず、どうしよう？」と悩んでいたという。そこへ大勢の慈濟ボランティアがやってきたのである。

「十数人も来て、リビングがいっぱいになるほどでした……」と彼女は感動すると同時に、感謝した。そして、ボランティアが贈ってくれた竹筒募金箱を両手に持ち、夫に向かって「私たちも愛を入れましょう」と言った。

0403地震で、花蓮の多くの建物が全半壊した他、壁の亀裂やタイルの剥落、塀の倒壊など、一部損壊の住宅も数百戸に上った。多くの住宅が被災したため、一時、地元業者だけでは全く修理が追いつかなかった。

慈濟基金会は、緊急支援金の配付や怪我人の慰問など緊急支援を終えた後、花蓮県政府と協議し、吉安郷、新城郷、秀林郷の一部損壊住宅の修繕を引き受けることにした。四月十九日から五月二十二日にかけて通報があった三百二十一戸に

ボランティアが家の前で着いたことを家主に知らせ、修繕チームが施工の準備をした（右上の写真撮影・蔡麗莉）。亀裂が入った住宅の壁面。手が入るほどの大きな亀裂もあった（下の写真撮影・陳亜屏、右下の写真撮影・黄雪芳）。



対して、実際に調査を行った後、家主が自力で修繕するか慈済が修理するかを決めてもらった結果、家主の同意を得て修理が完了したのは百六十八戸であった。時を置かずして、全半壊世帯の中長期的居住計画について県政府と協議した。

高雄、宜蘭、北部、桃園、新竹、中部から左官、鉄工、水道・電気など建築関連のプロが、工具と「愛」を携えて花蓮に結集し、工事が専門ではないボランティアは、事務や作業現場の手伝いをした。支援対象は経済状況で選別するのではなく、一人暮らしのお年寄りや貧しい

病人などを優先した。そして、その過程で更に慈済の支援が必要かどうかなども把握した。

修繕チームは花蓮のボランティアと郷長、村長などが同行して、初歩的な家庭訪問を行った。家主の案内で室内に入って、報告資料と現場の状況を照らし合わせながら、修理項目を話し合い、タイルやセメント、シリコン等の材料を見積もり、工事の日取りを決めた。同行した吉安郷勝安村幹事の温文彬（ウエン・ウエンビン）さんはこう話した。「一部損壊の住宅のほとんどは軽微な損壊なので、業

者もわざわざ来たがりません。ですから、慈済が直ちに支援の手を差し伸べてくれたことに本当に感謝しています」。

また、吉安郷北昌村の李さんもこう語った。

「被害が大きかった花蓮では、修理が必要な建物も多いのですが、来てくれる職人さんが見つからなくて……。慈済の行動は素早く、本当に助かりました」。

安全な住まいあつての安心

ボランティアを被災世帯に案内した吉

安郷勝安村の陳羿華（チェン・イーファ）村長はこう言った。「慈済の下見と温かい言葉には、ずいぶん元気づけられました。特に、被災地域が広く、被害を受けた建物も多いので、今すぐ業者を見つけてるのは容易ではありません」。

台北から来たボランティアの蔡明鴻（ツァイ・ミンホン）さんも、調査の過程で、多くの住居は被害こそ深刻ではなかったが、住人と話すうちに、彼らの不安な気持ちを感じられた。「家を修繕することで、住民に安心してもらえる」と蔡さんは言った。



亀裂が入った壁のタイルを電動ドリルで剥がし、損傷の深さを確認した。モルタルで亀裂を埋めてから、新しいタイルを貼った。(撮影・葉晋宏)

四月二十四日の午後、高雄と北部のボランティア計十人が、吉安郷の李お婆さんの家の修繕に訪れた。築四十年の古い家は、地震後に壁や柱に亀裂が入り、ドアフレームも変形しているようだった。ボランティアの林淑娥(リン・スーオ)さんが中に入ると、明るくあいさつした。「お婆ちゃん、この人たちは台北から来たんですよ」。

すると、お婆さんは心配そうに、「台北からの道は通行止めだよ。危ないのに」と言った。

ボランティアは、安全を確認してから来たことを説明し、「こんな状態を見ると、

私たちも落ち着かないですよ。ちよつと直せば、大丈夫ですからね！」と言った。お婆さんはなおも心配そうに「気をつけてくださいね！」と念を押した。

ボランティアの林世傑（リン・スージエ）さんはプロの左官である。地震発生後、すぐに慈誠隊工務チームに連絡を取り、「できることがあれば言ってください。仕事を置いてでも手伝いに行きます」と伝えた。花蓮に来て二日間、余震が絶えず、皆戦々恐々としていた。だからこそ彼は、尚更地元住民の気持ち的理解できた。

「表面だけ修理するのではなく、丁寧にこうすれば、鉄筋は長持ちするのだ。「法師は、自分の家だと思って直しなさいと言いました」と林さんが言った。ボランティアが忙しく作業している間、お婆さんはどこかに姿を消していた。皆に食べてもらおうと、自分で栽培したパイヤとオレンジを切りに台所へ行っていたのだ。セメントと砂が届くのを待っている間、皆がリビングで車座になり、お婆さんとおしゃべりをした。

その日は丁度、林さんの五十七歳の誕生日で、お婆さんも「おめでどう！」と祝ってくれたので、林さんは感謝して、「百二十歳まで長生きしてくださいね」

にやらなければなりません」。林さんはこれまでの経験から、もし壁や柱の中の鉄筋が錆びていれば、コンクリートが割れるため、壁面を壊して確認するしかないと判断した。「昨日下見に来た時、お婆ちゃんは『これだけの仕事でわざわざ来てもらってすまないね』と言っていましたね。でも、こんなに小さな亀裂なのに、こんな大きな穴を開けちゃいましたよ」と林さんが冗談めかして言ったので、皆大笑いした。彼は直ぐ「私たちの仕事は信用第一ですからね」と付け足した。

ボランティアは壁面のコンクリートを叩き落とし、中の鉄筋のサビを落としたり

と返した。その後、練ったモルタルを壁と柱に塗り、平らにして、工事は完了した。車が走り出し、山沿いの家がゆっくり遠ざかって行った。雨はまだ降り続いていたが、お婆さんのパイヤを思い出すと、皆心が温かくなるのを感じた。

地元チームも皆の拠り所

地震発生後、緊急ケアや配付作業に駆け回っていた花蓮のボランティアたちは、それが済むとすぐに復旧、復興支援に入った。花蓮合心チームボランティアの謝富裕（シェ・フーユー）さんは、各



地からやってきた慈済人に対して、「皆さん、遠くからはるばる駆けつけてくださって、本当にありがとうございます。抛り所ができて、本当に心強く思っています」と声を詰まらせた。謝さんによると、合心チームは毎日交替で静思堂に駐在して守り、外で働く法縁者におやつを用意したり、地元チームが修繕チームに同行して、訪問ケアと修繕作業を行ったりにしている。また、四月二十四日以降、静思精舎の師父たちは、進んで修繕ボランティアのために昼食を用意した。

浮き上がったタイルを取り除き、一枚一枚新しいタイルを貼った。(撮影・趙子雄)

慈済基金会慈善志業発展処防災チーム

リーダーの劉秋伶(リュウ・チュウリン)さんは、「余震が続いている花蓮には、来たがらない人が多いというのに……」としみじみと言った。彼女は毎日、修繕待ち、修繕中、修繕済み、自己処理、未連絡などの戸数を集計する他、連絡や接待、当番などもこなしていた。その過程で彼女が目にしたのは、五百人のボランティアがリュックを背負い、装備を満載した移動建材車で花蓮に駆けつけ、地元ボランティアと下見に行き、人手不足と材料不足を克服して、迅速に家を修繕

する姿だった。

ボランティアの多くは銀髪の高齢者だったが、彼らは「まだ若いんだぞ」と言って笑った。住民は崩れて地面いっぱい散乱した扉のレンガを前に、なす術もなかった。しかし、ボランティアたちは、十八キロの電動ハンマーを担ぎ、塀を次々に粉々にしてから一輪車に載せては、瓦礫を表に運んで積み上げていた。

花蓮では大勢のボランティアがチームを組んで働いた。街の至る所で白い靴を見かけ、優しいあいさつと温かい抱擁で、長い間の不安で張り詰めた住民の心

を解きほぐしていた。静思堂修繕サービスセンターの事務スタッフも大変な日々だった。毎日彼らが家に帰るのは、殆ど十二時を回っていた。一方、より多くのボランティアが参加するようになり、時間を登録して、事務や雑務を担った。また、花蓮慈濟病院の医師までもが、外来の休憩時間を利用してデータの入力を手伝った。

地震は人類に大自然の力を見せつけたと共に、人々は、社会の至る所に思いやりがあふれ、善と愛が行き交い、花蓮の街角に溢れるのを目にした。

(資料の提供・李志成、蔡翠容、蕭惠玲、吳玉対、莊玉美、蔡麗莉、李美慧、洪素養、吳亜馨、黃若嘉、劉秋伶、吳進輝)(慈濟月刊六九一期より)

倒壊した塀の瓦礫を片付けるボランティア。狭い路地は一輪車も入れないため、ボランティアたちがリレー式で運び出した。(撮影・黄雪芳)



仁者・杜俊元

—— 一九三八年〜二〇二三年

無我夢中で引き受ける

文・王俊富(記録映画製作者) 訳・惟明

二〇二二年二月、栄誉董事の杜俊元(ドウ・ジュンユエン)氏の高雄の自宅で、二日間の単独インタビューを行い、慈済でドキュメンタリーを撮影するという約束を取り付けた。

当時、既に病気で衰弱していた杜氏は、力を振り絞って、終始酸素吸入しながらインタビューを受けた。一つひとつの動作に、強い意志と後輩たちに対する心を込めた期待を見ることができた。

2001年10月13日、慈済関渡志業パークで開催された「一人一善 災難から遠ざかる」をテーマにした祝福会において、杜氏は代表で平和の鐘を鳴らした。彼はその一生を掛けて己の命を照らし出しただけでなく、無数の人を動かした。(撮影・顔森沼)



後山（花蓮の通称）出身の学生として台湾トップの台湾大学に入学し、更にアメリカ・スタンフォード大学に留学した。秀才の科学者にして実業家、そして大愛を持つ慈善家に至るまで、杜師兄は台湾における半導体産業の発展に非常に大きく貢献した。同じ半導体のパイオニアである胡定華（フー・ディンフワ）氏と共に、「北の胡、南の杜」と称された。

「事業をするのも良いですが、志業もしなければなりません」。證嚴法師がやんわりと杜師兄に言ったことがある。

彼は師匠のその言葉を心に銘記して、身を以て実行した。

財を捧げ、仏法の教えを説き、人々の不安を取り除いて安心を与え、

人生を終えた後は、慈済大学附属病院に献体し、「無言の良師」となった。

学歴：台湾大学電機工学学士、スタンフォード大学電子工学博士。

経歴：一九六七年、IBMワトソン半導体研究センターに入社。一九六八年台湾大学電気工学部客員助教授に就任、交通大学電子工学院院长教授を兼任。一九七一年、華泰電子会社創設。

一九七九年、聯華電子会社初代社長に就任。一九八七年、矽統テクノロジー社を創設。一九八八年、慈済に参加し、大愛テレビ局会長に就任。また、慈済大学慈誠認徳会ボランティア、慈済医療基金会理事、慈済南部榮善理事代表、志玄文教基金会理事、印證教育基金会理事などを歴任。

杜氏は資金と人材の確保に奔走し、一九七一年に初めて台湾独自資本の半導体クローズドベース会社、華泰電子会社（写真上）を創設した。台湾半導体産業のパイオニアとして、彼は創業当時から先端技術を導入し、電子工業を台湾に根付かせた。

（写真提供・華泰電子）





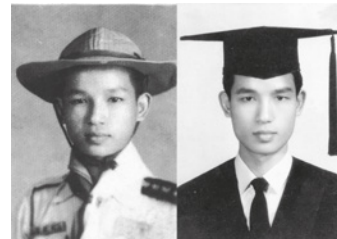
二〇〇七年六月十日、音楽手話劇「清浄・大愛・無量義」が花蓮静思堂で公演された。身を以て説法し、毅然とした姿は慈済人の典範だった。(撮影・王賢煌)



二〇〇八年四月十三日、実業家を主体にした静思生活体験キャンプの参加者が花蓮環境保全教育センターを訪れ、資源の分別を体験した。(撮影・郭玉婷)



自ら慈済の海外災害支援に参加した時、杜氏は深い感動を覚え、真の法悦を感じて、積極的にボランティア活動に参加するようになった。二〇一四年七月の高雄ガス爆発事故の時、ボランティアを統率して災害支援に参加し、被災者の心を慰めた。(写真右)



杜氏は中学時代から大志を抱き、故郷を離れて一大事業を成し遂げようと思った。しかし、彼の学問への道は決して平坦なものではなかった。その要因は家族の反対にあった。長い間、粘った末に、彼はやっと建国高校から台湾大学に進学し、一九六〇年に電気工学部を卒業した。



一九六一年十二月二十日、海外留学を控えていた杜氏は、大学三年生だった楊美瑛(ヤン・メイツイウオ)と結婚した(写真左)。一九九一年、慈済榮譽理事だった杜俊元氏(左)は楊美瑛さん(右)を伴って、静思精舎に證嚴法師を訪ねた。



二〇〇〇年、杜氏と美瑛さんは、長男夫婦と生まれたばかりの孫を連れて、證嚴法師を訪ねた。(写真左 撮影・阮義忠)。一九九八年元旦、大愛テレビ局が設立され、證嚴法師は杜俊元氏に会長職を託した。二〇一一年元旦、彼は大愛テレビ局が開局十三周年を迎え、人文志業が衛星放送で繋がったことを機に、各地のリサイクルボランティアの護持に感謝した。会長の杜氏は高雄静思堂でリサイクルボランティアにポスターを贈呈した。(撮影・潘機利)

孤独に甘んじ、 苦しみながらも初心を養う

二日間にわたる中身の濃いインタビューの中で、杜栄誉理事は何度も「苦」という言葉を口にした。初めは既に企業経営から遠ざかり、全身全霊でボランティア活動に投入していたのだが、二〇〇三年前後、手塩に掛けて育てた華泰電子が経営危機に陥り、数千人の従業員の生活を守るために、彼は劣勢を挽回すべく、力を注いだ。当時のことを振り返り、よく一人で瑠璃光如来像の前にひざまずき、涙を流しながらより強い意志と勇氣を持って、会社を苦境から救いたいと祈ったものだと語った。これらの心の内は、それまで誰にも打ち明けることはなかった。どんなに苦しく

1998年、妻の美瑛さんの考えを聞いて、砂統テクノロジীর会長だった杜氏は一気に十五億円（約六十億円）相当の土地を慈済に寄付した。その翌年、彼は更に時価十三億円（約五十億円）もの会社の株を寄付した。それは全て杜氏の證嚴法師に対する心の中の約束を実践したものである。ハイテク産業のバイオニアから慈済志業での全力投球まで、その過程において、妻はいつも一番大事な時に彼のために縁を逃さず、彼の人生の道をより広くさせて来た。（撮影・蕭耀華）



ても、全部一人で背負って来たのだった。

杜栄誉理事は、病気によって深い孤独感に直面した。肉体の苦痛は氣力で克服できるが、病気によって慈済の活動に参加できないことが、彼を苦しめた。苦とは、何かをしようとしても何もできないことだったのだ。

「ある日、杜博士に付き添って、空港で海外の慈済人を迎えに行く時、傍で彼が心から楽しく笑っているのを目にしました」。ある華泰電子の上級管理職が、こう振り返った。皆知っている杜博士は、社内ではいつも厳しい表情をしていて、仕事も全く手を抜かない。しかし、一旦慈済人となって志業に参加すると、最も輝かしい笑顔を見せ、あたかも俗世界の煩惱を忘れて、法悦の世界に入ったかのようにだった。実は、彼を孤独というプレッシャー

から解放したもののこそ、慈済だったのだ。

「管理職であるあなたたちは、孤独感を味わわなければいけません！」とある時会議が終わる前に、杜栄誉理事が出席した幹部たちをこう励ました。独りぼっちの孤独感と冷静に向き合うのは、困難に直面した時であり、それは如何にして原則と初心を堅持するかを学ぶ、なくてはならない修練なのである。孤独という言葉は、もはや俗的な感覚ではなく、高い所から、余裕を持って、遠くを見て、深く愛する、精神の輪郭なのである。この視点から見ると、彼と法師の姿はほのかに一枚の絵に溶け込んでいるように見える。

杜栄誉理事は身を以て教えてくれた。彼の言動、愛の言葉、公正さと直言に敬意を表したい。（慈済月刊六八五期より）

悪念を消して善念を増やし、良縁を結ぼう

過去の悪い考えから離れ、善を志してこの世で福を作り、時を善用して勤しめば、恩も恨みも忘れてしまいます。人との出会いは自分を成就させてくれる道場と考え、心して修行を続ければ、あらゆる生命と善い縁が結ばれるでしょう。



毎

日のように世の中のことを見聞きしますが、気候変動、国と国の争い、世の悲しみや苦しみ、また危機と無常を目にします。時を同じくして、慈済人は多くの国で活動したり、国際会議に出席したり、協力し合い、火災や水害、震災等々、関心が必要な所があれば、直ちに駆けつけています。送られてきた被災地の映像を見ると、辛くていたたまれなくなりそうです！そして、清潔で明るく、整った環境で生活できる幸せを、有難いと思うのです。

夏はエアコン、冬はヒーター、と生活に心配がなく、衣食足りて清潔な家に住み、交通が便利なのに満足しな

ければなりません。そのような幸せは当たり前には有るのではなく、過去に為した平安や富、愛ある行いによって、巡ってきた果報なのです。常に足りていることを知っていれば、余りある物にも恵まれます。日々心が平安且つ自在になり、福は自ずとやって来ます。もし何事も満足できなければ、永遠に何か足りないままです。幸せである自分を祝福し、欲を少なくし、足りることを知って奉仕すれば、絶えず福を作って福を増やせるのです。

仏陀の生きていた時代、故郷の地はとても貧しく、城門を出ると、生老病死の苦しみに喘ぐ一般人の生活を目に

しました。どうすればその苦難を救うことができるのかを考えた末、一人の力では限りがあり、王宮を離れることにしたのです。そして、永劫に天下の衆生を助け、人々が苦しみから解放され、再び無明の煩惱に囚われないようにする道を探し求めたのです。

仏陀の故郷に恩返しするのが、私の生涯の心願なのです。シンガポールとマレーシアの弟子たちは、それを理解し、自分の事業を手放してでも、私の代わりにネパールとインドに長期滞在し、慈善、医療、教育方面で行願してくれています。何かをするには人手が必要です。無を有に変えるには、現地の社会と深

く交流を重ねなければなりません。

彼らは元々、快適な暮らしをしていましたが、仏陀の故郷に行つて、社会的地位を捨て、暑さや寒さを耐え忍ぶのは、とても勇気が要ることです。現地で多くを見て、多くの事を為していますが、それは正に修行の道です。

仏陀が人間（じんかん）に來られた一大事とは、菩薩の道を教えることでした。慈濟人は仏陀の故郷に到達しただけでなく、早い段階から、仏陀の説いた法を自分たちが生活する国に弘めていました。それができていたからこそ、行き着くことができたのです。形ある事を成しただけでなく、身で以て

無形の教育を実践し、人々を善へと導いているのです。

慈濟人の「真」と「誠」を見て、私は、人間（じんかん）での生涯が充実したものになったと感じています。皆が志を一つに、共に菩薩道を歩んでいます。この道はとても長く、前に行く人が道を敷いて導いているが故に、後の人は一歩一歩精進しなければなりません。次の世代へ伝承される歩みは偏ってはならず、分から寸に、寸から尺に幅を広げ、しっかりと足取りで進むのです。

学びに終わりはありません。学びたいと思えば更に多くを学ぶことができます。

ます。もしも一知半解ならば、理解できたとは言えません。人生は無常で、時間には限りがあります。学ぶべきことは覚りであり、仏法で以て悟りを開くのです。「学」から「覚」に達するには、菩薩道を歩むしかありません。赤子の心で学びを重ね、「道」を理解し、学んで、それを確認し、更に人を伴つてこの大いなる道を一緒に歩むのです。

一分一秒を把握して福を作り、無明で業を作らないよう警戒することが、即ち修行の重点です。

自分で日々の生活を見つめ直すとは、

いつも忙しくしていても、どれだけの事をやり遂げたかと考えてしまいませぬ。結局、どうしたらいいか分からず、明日に期待するしかないのです。この世で修行するのは、淡々とした日々ではあっても、それは享受だとも言えます。それなのにまだ、できるのだからかと自問を繰り返したりして、毎日やはり、気になることがたくさんあるのです。

一日の八万六千四百秒は、一秒一秒がチクタクと過ぎて行き、それほど長くはないのです。最も現実的なこの瞬間を捉えて、一分一秒、全ての時間を

自分に借りがあるとか、この借りは必ず返すと覚えているのに、自分が人に対してすまないことをしたとか、私はどう償えばいいのかということとは、あまり覚えていないものです。前述のような負の気持ちが増積すると、今までの悪因、悪縁は消えないだけでなく、逆に悪念は積もり、心の無明は益々増え、業による障害は高くなるばかりです。

悪念が消えて善念が増えると、自ずと業の障害は消えます。悪念を忘れ、善念を志して福を作り、時を善用すれば、忙しさに恩も怨みも忘れるでしょう。人との出会いは自分にとっての道

後悔しないようにするのは、生涯を通じてこのように生きれば、良心に恥じることはありません。そこでいつも、「一日過ぎると命はそれにつれて減る」という言葉で自分を励ますと共に、警鐘を鳴らしているのです。

仏陀がこの世で教えたことは「諸悪を行わず、多くの善い事を行う」であり、私たちの修行の二つの重点でもあるのです。一つは人生の改善、もう一つは無明で業を作れることを予防しているのです。

多くの人は兎角、人との関係や物事でトラブルを作ります。いつまでも人は

場であり、人に良い印象を与えることは、今日その人に対する修行であり、人生において善縁を結びます。人と人の関係は互いに道場と見なし、尊重し敬愛し合うことで、多くの善縁を結び、この世は睦まじくなります。

この生涯で善の種子を育て、熟成させ、私たちと縁のある人に寄り添い、ケアすることで、その善の種子を来世まで持つて行くのです。時を把握して、人間（じんかん）を善用し、どの世でもしっかりと地に足を下ろすことです。皆さんが心して精進することを願っています。（慈濟月刊六九二期より）

食卓の新たな主役はオクラ



一〇二三年の夏、静思精舎の野菜畑は、いつもと違っていた。新しく植えたオクラが、一面に生い茂る緑の葉の上に浮かぶように淡い黄色の花をつけていて、遠くから人目を引いた。このオクラ畑を見て、数年前のある夏の出来事を思い出した。

毎日精舎で使う野菜はほとんど自分た

ちで栽培したもののだが、あの年は颱風が頻繁に来襲し、農作物の成長と収穫に大きく影響した。また、台風が過ぎた後は、野菜の価格が倍に跳ね上がり、精舎で新たに植えた野菜は食事の需要に追いつけなかったが、幸いなことにオクラは収穫があった。オクラは食物繊維、ミネラル、カルシウム及び多くのビタミンを豊富に



含んでおり、ネバネバした成分は胃にとっても良い。オクラは元来、精舎の献立の中では副菜に使われていたが、過渡期には、ほぼ毎日食卓の「主役」になった。おかげで私たちは、あの夏を乗り越えた。

二〇二三年十月、台風十一号（ハイクイ）が花蓮に上陸し、精舎の菜園が大きな影響を受けた。それでも、一面のオクラは依然として揺るぎなくそそり立ち、風雨が過ぎた後は一層すくすくと成長し、メニユールを豊富にしてくれた。「苗から成長して収穫するまで、既に三つの台風に遭遇しました」。この時オクラ菜

園を管理していた徳勇（ドヨン）師父がこう言った。

「修行者はこのようにあるべきです。社会の試練に堪えてこそ、天と地の間にそそり立つことができるのです」。

強い日差しの下でオクラを採取していた徳勇師父は、感謝の気持ちを込めて語った。

「一日おきに、大きな袋がいっぱいになるほど採れます。私も度量を大きくして幸福を分け合い、皆さんに喜んで食べてもらいたいです。未来の仏に供養することは、私にとっても喜びなのです」。

オクラは、成長して収穫が終わるとその下の葉っぱも一緒に切らなければならないが、これはなぜだろう。

「捨ててこそ得るものがあるのです。この葉は既に役目を終えています。もし残しておく、他の枝葉の養分を吸い取り、成長中のオクラの実が栄養不足になってしまいます」。徳勇師父は、これがすなわち、證嚴法師が教えてくれた「第六識を妙觀察智に変える」ということだと言った。栽培するうちに経験を得て、残すべきは何か、捨てるべきは何か、分るのである。（慈濟月刊六八六期より）



食育教育

【特集】

世界で飢餓に苦しんでいる人口が七億人を突破した今、食べる分だけ取ることは、一種の美德である。小学生による食品ロス削減への取り組みは、食べ残しを減らすための改善策によって、この危機を覆すことに成功した。

文・葉子豪

撮影・顔霖沼

訳・御山凜

●台南市私立慈濟高校小学部では、教室での給食の食べ残しはほぼゼロに近い。



各クラスの食べ残しは120グラム

台南市私立慈濟高校小学部の一日あたりの給食の食べ残しは、三年前の三十五キロから今では三キロにまで減り、平均すると一クラス僅か百二十グラムである。六百人余りの小学生はいかにして成し遂げたのか？

「米 粒も野菜もスープも、苦勞して得たもので、ゆっくり噛んで味わい、

天下の衆生の恩に感謝しましょう」。給

食の時間になると、台南市私立慈濟高校小学部から「感謝の歌」が聞こえてくる。

福を惜しみ、食を惜しむ考え方は、日々

の繰り返しによって潜在意識化し、多くのクラスでは食べ残しゼロ運動で、「お皿を空にする」目標を達成している。

台南市私立慈濟高校小学部教頭の顔秀雯（イェン・シュウウェン）さんが、二〇二一年に始まった「お皿を空にする

（食べ残しゼロ）」活動の由来を説明した。食べ残しを改善の目標にした理由は、生徒たちがセントラルキッチンを参観した際に、一回の給食で、六百人余りの生徒が作り出す食べ残しの量を軽んじてはならないことを実感したからだ。

当時の食べ残し量はどれくらいだったのか？顔さんは詳細に記録を残していた。同校小学部で出る食べ残し量は、一日で三十五キロであった。他の同程度規模の学校と比較すると多くはなかったが、「一学期に百日の登校日があると計算すると、三千五百キロ、つまり三・五トンの食べ残しが出ることになるのです」。

この事は顔さんを驚愕させ、「先ず食べ物背景にある生産や輸送から出るカーボンフットプリントの問題を除外しても、食糧の生産につき込んだお金と農民の苦勞を考え、更に世界で飢えている人口があまりにも多すぎるのに、私たちは食べ物に浪費していたのです！そこで皆で食べ物を残さない運動から着手しました」。

好き嫌いの組み合わせ

環境部の統計によると、台湾のこの十年間に家庭から出た生ゴミの回収量は、一人あたり年平均で二十四キロに達



●小学部の教室で、生徒は順番に給食を取り、給食トレーにお椀を載せることで、整然とした盛り付けになり、色や香りや味を引き出していた。

した。台湾全土の五十万トン余りの生ゴミに、生産と販売の過程で出た規格外品や売れ残りにより廃棄された物を加えると、一年間の食品ロスの総量は百万トン以上になる！

三年前、顔さんは生徒を連れて、環境部とアメリカ環境保護庁が共同で行った「台米エコ・キャンパス」(US-Taiwan Eco-Campus)プロジェクトに参加した。その主旨は、生徒が自主的に様々な環境

問題を解決するようにと期待したもので、その内の一項目が「サステナブルフード」（持続可能な食）である。「私たちは学校のセントラルキッチンで栄養士がどのように給食の献立を作っているのかを聞き、残った食べ物の処理状況を観察して、初めて分かったのです！わあ！生ゴミが本当に少なくなーい！」。

台米エコ・キャンパスプロジェクトのサステナブルフードチームに参加した生徒は、インターネットで資料を集め、三人寄れば文殊の知恵で、最後は「光盤」（空の皿）というプロジェクトネームに決定した。校内で食べ残し削減を宣伝し、

を請け負う業者も協力し、小学生が発起したこの運動を正面から捉え、各クラスの計量測定を手助けするだけでなく、クラス毎の毎日の人数の変化に合わせて、おかずの量も調整した。

例えばコロナ禍の間、生徒は学校に登校することができなかつたため、給食を食べる人が減り、担任教師はセントラルキッチンに主食とおかずの量を減らすよう知らせた。生徒たちも互いに、取った分のご飯とおかずは全部食べるよう呼びかけた。仮に給食用容器に残り物があれば、皆で一口ずつ分け、捨てるものがないようにして、クラスの

教師や生徒に食べ物を浪費せず、捨てる食べ残しを極力減らすよう呼びかけた。同校生たちは特別に、「お皿を空にする大使」の賞状を作成し、着実に食べ残しゼロを実践した優秀クラスを奨励した。

第一回「お皿を空にする」運動を推進した小学生のメンバーで、今では中学二年生になった魏靖軒（ウェイ・ジン シュエン）さんによれば、小学生は計量と記録に不慣れなので、この活動には教師と生徒が一緒に参加し、横で教師がサポートした。

小学部の教師と生徒が取り組みを始めたのみならず、セントラルキッチン名譽を保った。その他、ベテラン栄養士の方でも、どの料理が生徒に比較的人気がないか等、献立を考える時に工夫して、細心の注意を払っている。栄養士の葉佳紋（イェ・ジャウエン）さんは料理の小さなコツを話してくれた。「苦瓜などは、子供に食べてもらうために、メイン料理にはしません。ピーマンも横に添えるだけです。私たちは子供が食べてくれるような方法で作ります。例えば、好きな物と嫌いなものと同じ料理に入れ、彼らに美味しいものを食べながら苦手なものと一緒に食べてもらうのです」。



●それぞれの年齢のニーズに沿って、出席人数に合わせた配合で、給食の食べ残しを減らすと同時に（左の写真）、生徒の日々の食のバランスを更によくしている（右の写真）。



数値化して食べ残しをコントロール

教師、生徒、給食提供者の協力の下、食べ残し削減効果が徐々に現れた。「お皿を空にする」運動は先学期の二〇二一年九月から始まって十二月までに、全校の食べ残し量は一トンを下回り、九百キロ余りになった。一学期を百日と計算すると、全校の一日の食べ残しが僅か九キロになったのに等しい！以前の一日三十五キロと比較すると、改善の効果は顕著に現れていた。

その年度の二学期、即ち二〇二二年の

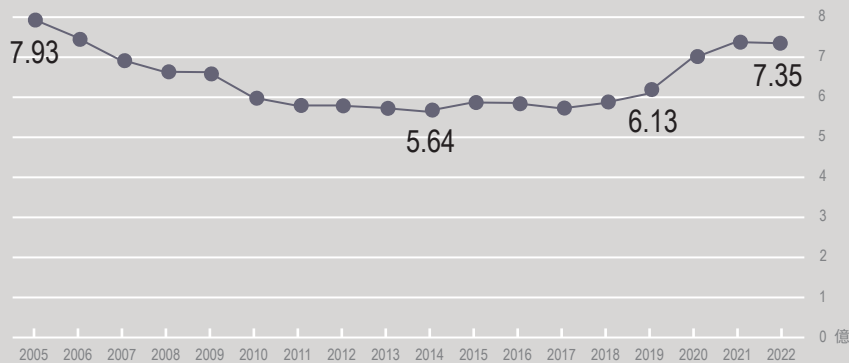
一月から六月までの間、更に一学期で三百キロという記録を立て、一日の食べ残し量が僅か三キロという好成績を残した。小学部二十五クラスで、各クラス一日に平均して僅か百二十グラムの食べ残しを出しただけに等しい。

その過程では紆余曲折もあった。全校の食べ残し量が既に一日二十キロまで減っていた頃のある日、給食を終えて、教師と生徒たちがいつものように食べ残しの重さを計ったところ、数字が三十五キロに跳ね上がったことに愕然した。驚きのあまり、皆で骨の折れる作業

に関わらず、答えを探し始めた。

「結果として分かったことは、あの日はうどんだったのですが、うどんと豆腐は歯ごたえがあり過ぎた上に、比較的大きく切られていたのです」。顔さんの記憶によると、あの日食べ残しが最も多かったのは一年生と二年生で、低学年の生徒はちょうど乳歯から永久歯に生え変わる段階で、咬合力も咀嚼力も比較的弱く、硬めの食材は食べるのが遅く、少なくなるため、食べ残し

世界で飢餓に直面している人口の統計



● 食糧不足 (単位: 億)

注: 2019年新型コロナが勃発し、2022年までに世界の飢餓に直面した人口は1.22億人増加した。

データソース: 国連食糧農業機関『2023年世界食糧安全保障と栄養状況 (The State of Food Security and Nutrition in the World Report: SOFI)』

は自然と増加する、という。セントラルキッチンチームは「うどん事件」の経験を活かして、献立を作る時は、同様の状況が再び起きないようにしている。

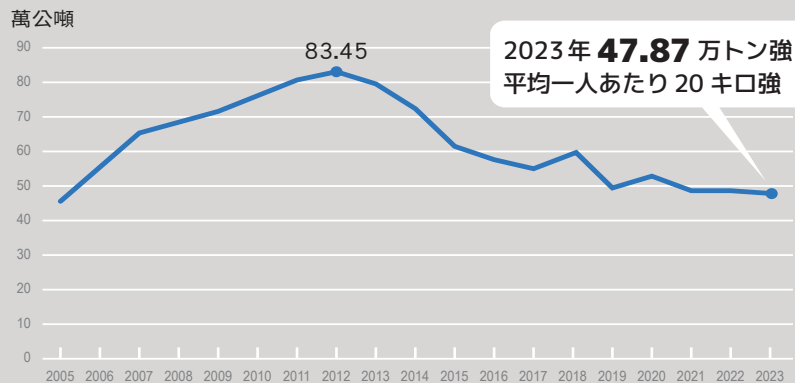
「食の安全面では、セントラルキッチンが残留農薬を検出する機器を設置してくれたので、とても感謝しています。農薬を測定し、以前に一部不合格の野菜を返品したこともあり、台湾全土でこのような取り組みをしているところは少ないのです」。姚

智化（ヤオ・ゾーファ）校長によれば、同校の給食請負業者は、菜食調理に長けており、幼稚園から高校までの各学年の生徒に必要な栄養を考え、また中学、高校生の夜の自習時間には夕食を提供しているため、仕事量が増えても依然として全力で協力してもらっている。

「厨房はとても配慮してくれています。生徒や保護者から学校の食事がまずいとか量が足りないというクレームは殆ど聞かれません。この点を達成するのはとても難しいのですが、貴重なことでもあるのです」と姚校長が称賛した。

データソース：環境部

台湾年間食品廃棄物発生量グラフ



2023年 **47.87** 万トン強
平均一人あたり 20 キロ強

「カーボンフットプリントの検証」 児童版

同校小学部は「お皿を空にする」運動を推進し、実際に計量したデータを用いて、教師や生徒たちに食べ残し問題の深刻さを知ってもらい、さらに食事をする人数を報告し、過剰な提供を避け、食を惜しむことを教えている。

この運動はグローバルな食糧問題に正面から取り組んでいる。国連食糧農業機関（FAO）の二〇〇〇年から二〇二〇年の統計によれば、主要な農作物である



●食事後、5年生の感恩クラスの生徒が食缶等を返却する様子。食べ残しの計量と回収が待っている。そのクラスは食べ残り削減の目標を達成し、教室のドアには「お皿を空にする大使」の賞状が掛けられてあった。

サトウキビやトウモロコシ、小麦、米の生産量は五割増加し、二〇一九年、九十三億トンに達した。生産技術の進歩は食糧の需要をはるかに上回ったが、それに矛盾して、全世界では同時に数億人が飢餓と栄養失調の危機に瀕している

のである。廃棄される食物の浪費は、食物そのものだけでなく、食物の生産や輸送、保存の過程で発生する資源の消耗も浪費しているのだ。「お皿を空にする」プロジェクト初期の構想と運用方法から見ると



●食べ残しの計量は毎日給食後の日課で、多くのクラスはいつも食べ残しゼロを達成しているが、少数のクラスは食べ残しがあっても、グラム単位である。

今日で最も話題性のある「カーボンフットプリント検証」児童版とみなすことができ、食べ残しを減らすことは、食糧資源を有効利用することに役立ち、そして関連した温室効果ガスの排出削減にもつながっている。国連十七項目の持続可能な開発目標(SDGs)に照らし合わせると、第十二項目(SDGs.12)「責任のある消費と生産」に合致する。これは有意義な善行であり、生活の中に根を下ろ

した学習だと言える。
この過程で、推進担当の生徒たちは知識が深まり、コミュニケーション能力と自信を強化することができた。食べ残し削減に呼応し、自発的に食を惜しむ運動に参加した全ての生徒たちは、教師たちが丹念に配合した栄養を吸収し、成長過程でより健康になるだろう。

(慈濟月刊六九一期より)

一株の野菜の誕生

文・葉子豪 撮影・顔霖沼
訳・葉美娥

食卓に並ぶご馳走、その食材が成長するまでを見たことがあるだろうか。自分の手で種を蒔き、発芽して収穫に至るまでを観察し、更に輸送と調理の段階を経る。一株の野菜を食べるのは、容易なことではない。

「ミズがいるよ！」小学生たちは、長さが三十センチ以上もある太い茎と大きな葉を付けたヒユ菜を抜きながら、互いに注意を促した。学校のテストと重なったので、園芸ボランティアが他の果物や野菜の収穫を先に済ませ、わざ

とヒユ菜の収穫を一週間延ばして、子どもたちに自らの手で収穫体験をしても良かった。一番美味しく食べられる収穫時期は過ぎたが、自然に成長した野菜を見るのもまた、別の意味での収穫である。台南市私立慈濟高校小学部は、校庭の

片隅に小さな菜園を設け、園芸担当ボランティアの保護者と「台米エコ・キャンパス」プロジェクトに参加している高学年の生徒に、様々な果物や野菜の栽培を体験させている。毎週金曜日の午前中になると、大人も子供も軍手を付け、鍬やシャベルを手にして校庭で農作業をする。

農薬を使用しないため、葉っぱには虫食いの穴が開いているが、子供たちは、自分たちで育てたヒユ菜を手にして誇らしげに自慢した。菜園の隅には新鮮な野菜が山積みされている。園芸ボランティアは、子供たちに整地して新たに野菜を育てることを教え始めた。

白髪のお婆ちゃんボランティアは、子

供たちに空心菜の種を、ヒユ菜を収穫した後の畑に均等に蒔いて、土は軽く被せれば良いと教え、三日後には、野菜の苗が頭を出ているのが見えるよ、と言った。

農作業の時間は朝八時に始まり、三十分ほどで終わった。生徒たちは収穫、整地、種まき、肥料の施し、水やりなどの手順を完了した。四月中旬に種を蒔くと、五月下旬か六月上旬頃には美味しい空心菜が採れる。農作業には汗が付きものがあり、手足が泥で汚れたりもするが、皆楽しんでいた。

「このような田舎の農作業は、親が休日に畑に連れて行って見せない限り、今では体験する機会が非常に少なくなってい



●台南私立慈濟高校小学部の生徒たちは、楽しくヒユ菜を収穫し、野菜が自然の条件の下に本来の姿で育つことを知った。

ます。しかし、私たちの学校では、遠くに行かなくてもここでそれを体験する事ができるので」と台南市私立慈濟高校小学部保護者会会長の徐栄勝（シュー・ロンスン）さんが言った。彼は息子が小学二年生の時から園芸ボランティアに参加し、親子で一緒に野菜作りをしてきた。息子はもう中学二年生だが、徐さんは相変

わらず小学生に野菜作りを指導している。「野菜作りは簡単ではありません。発芽してから成長するまで、皆さんが食べている野菜は全て、このように栽培されているのです。子供が野菜はどのような育て方を理解すれば、少なくともお碗に入っているものは大切にしましょう。食べ物を手に入れるのは容易で

はないので、全部食べなければなりません」と徐さんは懇切に言った。

菜園で育てた食卓の野菜

多くの親は、野菜を食べさせるために子どもたちをあやすが、飴と鞭の両方を使っても、子どもたちは口を固く閉じたままか、泣くかのどちらかである。アメリカ・イェール大学の心理学部で、生後八カ月から十八カ月の赤ちゃんの前に、金属製やプラスチック製の偽の植物と本物の緑色の植物を置き、赤ちゃんが自由に選択する実験をした。すると、本物の

緑色の植物には手を出さず、金属製品と偽の植物を掴んだのである。心理学者は、赤ちゃんは中毒を起こしたり、鋭い舌や綿毛などで怪我したりすることがないよう、本能的に緑色の植物を避けていると結論づけた。これは遺伝子に刻まれた生存本能なのである。

この発見から一部説明できるのは、フランスの取れた飲食は後天的な学習に頼るしかない、ということであり、もっと大事なのは食物が何処から来たのか、自分とどんな関係にあるのかを理解することである。「心に訴える」食農教育が必要なのだ。

二〇二二年四月に立法院（国会に相当）で成立した《食農教育法》には六つの指針がある。地域の農業を支持すること、バランスの取れた食事概念を育てること、食物を大切にして無駄を減らすこと、食文化の継承と革新を図ること、飲食と農業の関連性を深めること、地元の農産物を地元で販売する持続可能な農業の推進などである。教育部の奨励の下に、

多くの教職員や生徒が農村、漁村、畜産牧場、食品加工工場など食と農に関係した場所を訪問し、食糧の生産過程を理解した。多くの学校は校庭の菜園で果物や野菜を育て、鶏を飼育して卵を生産して

いるところもあり、生徒が近くで観察し、学べるようにしている。

台南市私立慈濟高校小学部の菜園での収穫量は限られている上に、給食の安全性を考え、提供基準では勝手に規定以上のおかずを追加してはならないため、菜園で取れた野菜は日常の給食では見られない。殆どは園芸ボランティアや生徒が持ち帰ったり、教員に配ったりし、一部は特別な贈り物として、学校を訪れた来客に贈ることにしている。

顔秀雯（イエン・シウウエン）教頭は、子供たちが普段食べている果物や野菜を育て、ここが「食卓の風景が見える菜園」



菜園から食卓まで、食材を得るのは容易ではない

台南市私立慈濟高小部の校庭の片隅にある菜園には、色々な野菜や果物が植えられている。朝の30分間が農作業の時間で、園芸ボランティアの指導の下に、小学部の生徒たちは空心菜の種を均一に蒔いてから、軽く土を被せた。子どもたちは自分の手で植え、発芽から成長まで世話をすることで、食卓のあらゆる野菜が容易に得られるものでないことを体験した。



になることを期待している。「野菜作りをしている子供たちは、日常の食卓で食べている野菜や果物に対して、観察と記録をし、小さな種から徐々に芽が出て、成長するまでの過程が容易でない上に、輸送や調理など多くの人が関わっていることを知っていますから、この一品の料理だけでも、多くの人の努力によって成り立っていることを考えてもらえれば、一層感じるところが出てくるでしょう」。

慈済大学サステナビリティと防災学科 修士課程の主任である邱奕儒（チュウ・イールー）教授は次のように指摘した。「現在の人類が直面している最も深刻な問題の一つは、食べ物がどのようにして



土地から育ったのかを知らず、土地とのつながりを失ってしまっていることです。都会の多くの子供は、大地で食べ物を育てるなど想像することすら出来ません。しかし、人間と天地とのつながりが啓発されれば、自然と心から自信と安心の気持ちが生まれるはずです」。

「従って、食農教育は早ければ早いほど良く、大地から品徳を学ぶべきです」と邱教授が重みのある言葉で言った。

台南市東区にある復興小学校は、科学技術を応用した設備を導入し、廊下で野菜の水耕栽培をしている（写真右）。先生と生徒は、花壇で果物や野菜を栽培しているが、パイヤの幹を九十度寝かせて固定すると、そのまま成長して花が咲き、実が生った（写真左）。

（慈済月刊六九一期より）



慈濟はこうやって発展してきた

この世を庇護する大愛エネルギーは、小さくて僅かな力から生まれ、目に見え、聞こえる範囲から始まった。

◎文・釋徳仇／訳・済蓮

専用品座募金で約束を守る

慈善基金会顧問の謝景貴（シェ・ジングエイ）師兄と宗教所職員は、元日に起きた能登半島地震被災地への慈善配付について、上人に指示を仰ぎました。

「慈濟人は被災地に行って奉仕し、また戻って来ると人々に約束しました。ですから、約束は守らなければいけません。信用が一番です。四月三日に花蓮で地震が発生しましたが、石川県の方も関心と祝福

の言葉を伝えて来ました。慈濟人は感謝の気持ちで、『今回の花蓮地震は大きなものでしたが、大方無事で、感謝に値するものです。ですから心配なさらなくてください』と返事をしてください。また、『慈濟は以前から用途別に寄付金を募って使用しています。台湾国内と海外の災害支援は別々になっており、全て寄付する人の意向に従って、一元残らずそれぞれの項目に入るようになっていきます。ですから、二つ以上の項目で互いに影響し合うことはなく、当初の計画通りの日程で配付活動を行うことができます』と伝えてください。」

慈濟人は、実際に能登半島の被災地に行つて炊き出しを行い、時間をかけて住民と交流したことで、弱者の生活がどんなに大変かが分かりました。上人は特に、一人暮らしのお年寄りや老夫婦世帯に対して、家屋が損壊すれば、もう再建する余力はないのだから、と関心を寄せて言いました。

「高齢の被災者に対して、慈濟人は相手の身になって考え、台湾での支援と同じように、『肌で感じ取ることができる』経済的な支援を

しなければいけません」。

景貴師兄によると、能登半島地震の甚大被災地区に位置する穴水病院では、花蓮で地震が起きたことを知ると、台湾に恩返しするために、自主的に募金活動を始めました。能登の人々は、自分たちの家や田畑が酷く損壊していても、真っ先に長い間の貯金でいっぱいになった貯金箱や受け取ったばかりの補助金を持ち出して寄付し、台湾を祝福すると同時に、頑張って欲しい気持ちを表したそうです。そのほか、台湾に支社がある日本企業も寄付を行い、日本のコンビニチェーンは台湾の地震のための募金活動をしました。

上人はこう言いました。「トルコの地震では、慈済が支援した被災世帯も慈済の『愛を募る』募金活動に呼応し、持っていた僅かなお金を寄付していました。慈済人はその貴重な好意を功德の海に入れました。その行いは大衆に布施する機会を与えたことを意味します。慈済は被災者や苦しんでいる人が最も助けを必要としている時に支援し、彼らは慈済の「竹筒歲月」の話とその意義を聞いて恩返しをし、

一緒にこの世の大福田を耕そうとしています」。

「寄付は奉仕だと言われますが、実は福田を作る行為であり、『福の気』を集めているのです。多くの人が奉仕すればするほど、その多少に関わらず、真心で人助けする心さえあれば、『善の気』を結集することができるのです。『善の気』が濃いほど、人間（じんかん）は平穏になります。私たちは発心して寄付してくれた人々や企業、団体に対して、心から感謝の意を表すことができます。人と人の間は親切で善の交流と助け合いがなければならず、丁重に見える態度で以て距離を取ってはいけません。災害が発生すれば、片方が奉仕し、もう片方が受け取って、心から尽くすのです」。

誰の心にもある愛の祝福を募る

宜蘭の榮譽董事（略して栄董）チームが精舎に帰って来て、花蓮地震の災害支援に力を添えたい、と言いました。上人は、「災害が発

生してから愛の募金活動をするのは、自然災害が人類に対する大いなる教育であり、この世は無常で、国土は脆い、という道理を示していることを大衆に伝えるためです」と言いました。

「仏陀は成道してから衆生に説法をしました。初めに苦、空、無常を説いたのは、最も真実を表している道理だからです。皆さんは常々、私が無常と言うのを聞いて、一つの名詞に過ぎないと思っただけかもしれませんが、今、体得できたのではないかと思えます。強い地震は突然襲って来ます。地面が揺れましたが、何の予兆もありませんでした。マグニチュード七・二の強い地震でも、私たちはこうして平穏で居られることに感謝しなければなりません。多くの仏教徒は仏や菩薩に感謝しますが、その実、私たちは衆生の『福』に感謝してこそ、悪業を転じて苦しみを軽く受け取ることができるのです」。

「花蓮の慈濟人が地震発生後、直ちに行動に移し、多くの地点に奉仕拠点を設け、避難した住民のニーズに沿って日常生活の物資を提供したり、緊急支援金を配付したりしました。今でも多くの人は、家

が傾いたり、損傷が激しいために帰れなくなったりしています。慈濟がすべきことは、積極的に行政機関と連携して、住民が落ち着いた生活をするために、民間団体がどのようにして被災住民の生活に協力できるかを理解することです。ですから、今、慈濟人は募金集めをするだけではなく、最も重要なのは、人の力、心にある愛、そして情を募ることです。つまり、善意の人であり、一人ひとりの無私の大愛を募るのです。それが「菩薩を募る」ということなのです。呼応してくれる人が多く、人間（じんかん）菩薩が増え、愛の力が大きくなれば、助けを必要としている人に奉仕できるのです」。

上人は、師兄や師姐たちが機会を逃さず、地震による無常という教育を大衆に示すことで、人心の愛を啓発していくことに期待しています。日々の積み重ねである「竹筒歲月」という方法を用いて、人々が生活に影響しない程度に、日々人助けの善意を起すよう呼びかけてください。少しずつ続けて愛の力を貯めるといふ敬虔な心と行動が即ち、愛の祝福なのです。（慈濟月刊六九一期より）

七月の出来事

・・・・・・・・・・・・・・・・

訳・済運

07・01	<p>◎慈済カナダ支部はカナダデーに五地区合同清掃活動を催し、リッチモンド、バンクーバー、バーナビー、コキットラム、サレーなどで、環境とビーチの清掃が行われた。</p> <p>◎ポーランド・ワルシャワの慈済ボランティアは、1日から5日までと8日から12日まで夫々、マゾフシェ県ウオミアンキで五日間のウクライナ難民子供キャンプを催し、生活と品德教育及び環境保護に関する講座が開かれる。</p>
07・03	<p>慈済インドネシア支部による貧困世帯住宅建設支援プロジェクトが、ジャカルタ市政府と共同で、西ジャカルタ・パルメラ町で展開された。</p> <p>2023年8月6日に郭再源副執行長がチームを引き連れて実地調</p>

07・04	<p>慈済基金会はブラジル・リオグランデ州の水害被災民に関心を寄せた。4日から10日まで二度目の水害視察団を結成し、サンレオポルドなど甚大被災地を視察し、配付と学校の清掃活動を行うことを決めた。</p>
07・08	<p>国連持続可能な開発サミットが8日から18日までアメリカ・ニューヨークで開かれる。慈済基金会から7人が代表で全日程に参加し、他の団体と共同でサイド会議も催し、持続可能な発展に関する討論を行う。</p>
07・11	<p>◎慈済グアテマラ連絡所は「施設に関心を寄せる」活動で、ボランティアがプログレソ州サン・アグスティン市に向いて、慈済コミュニティ</p>
	<p>査を行った後、同年10月12日に対象世帯と支援建設の同意書にサインした。本日、第一期の「吉祥アパート」と名付けられた、集合住宅の使用が始まった。</p>

	07・16
<p>济テキサス支部は、ヒューストン・フードバンクと協力し、大量のボランティアを動員して災害応急物資の整理と梱包を手伝った。13日と27日には支部で被災者に野菜や果物を配付する。</p> <p>◎慈済基金会は能登半島地震被災者ケアにおいて、炊き出しに続いて「仕事を与えて支援に代える」活動、慈済カフェでの奉仕などを行って来た。四回の見舞金配付活動は、5月17日から順次、穴水町、能登町、輪島市、中能登町、珠洲市、志賀町で行われ、世帯人数に合わせて13万円、15万円、17万円が届けられ、被災者は実用的支援として目の前の困難を乗り越えることができた。四回27会場で11302世帯の24255人が受け取り、期間中に動員されたボランティアは日本と台湾を合わせて延べ1141人に上った。</p> <p>◎慈済基金会は能登半島で地震が発生すると、数日後には日本支部が</p>	

	07・13
<p>児童センターの27人の子供とグループ活動すると共に、粉ミルクと玩具などを贈り、老人ホームを慰問しておむつなどの物資を届けた。</p> <p>◎慈済フィリピン支部はパロ大愛村の移管式を行った。それは2013年の台風ハイエン災害支援に由来する。慈済は緊急支援の後、中長期計画に移行し、現地政府が提供した14400平米余りの土地に永久住宅村落の建設を始めた。60戸の永久住宅と多目的ホール、セントラルキッチン、職業訓練センター、託児所などが揃っている。</p> <p>◎慈済フィリピン支部は11日から13日まで、レイテ州立病院で第265回の大規模施療活動を行った。5443人の患者を診療し、そのうちの86人は甲状腺腫瘍やヘルニアの手術を受けた。</p> <p>8日、ハリケーン・ベリルがアメリカ・テキサス州を襲った。多くの住民は停電によって冷蔵庫の食べ物が腐敗し、生活に支障が出た。慈</p>	

07・24	<p>の消防車と86人の消防隊員が出動して消火に当たった。慈済ボランティアは消防署の知らせを受けて、チームを現場に派遣し、指揮センターとボランティア奉仕拠点を設置して、ミネラルウォーターやスポーツドリンク、コconaツウウォーター、常温保存牛乳、アイス、菜食弁当などを消防隊員の体力補充に提供した。</p> <p>台風3号は強風と大雨を伴って来襲し、満潮時に重なって高潮が発生した。25日の早朝に台風が上陸する前日には既に台湾全土で被害が伝えられ、住民が避難所に入った。慈済基金会はケアと緊急支援を展開し、24日の昼、静思精舎の師父たちがボランティアと共に炊き出し弁当を佳民小学校に避難していた住民に届けた。また、屏東県では政府の要求に応じて、高雄静思堂から40枚の福慧エコ間仕切りテントを避難所になっている三地門体育館に届けて設置すると共に、各地の慈済ボランティアは現地のニーズに沿って人員を動員して支援した。</p>
-------	--

07・18	<p>3月に水害が発生したケニアで、慈済基金会はラブ・ビンティ・インターナショナルと協力して、現地の慈善機構「希望の光」と共に引き続き被災者ケアを行っている。5月にクワンザで配付が行われたのに続き、本日より20日までブシア・カウンティのブンヤラにある五つの被災者避難用テントエリアで1900セットの食糧パックが配付される。</p> <p>台南市山上工業区にある産協企業会社の工場で大火が発生し、41台</p>
07・19	<p>チームを結成して視察に向かった。1月13日からの穴水町での炊き出し、「仕事を与えて支援に代える」活動や慈済カフェなどの奉仕が続いた。6月25日までの統計によると、13097食の炊き出し、10028杯の温かい飲み物の提供、「仕事を与えて支援に代える」活動に参加した数は延べ220人となっている。また本日、金沢工業大学に通う被災世帯の学生48人に助学金が支給された。</p>

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966
志業センター (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

アメリカ

総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ニューヨーク支部
(New York)
TEL: 1-718-8880866

香港

TEL: 852-28937166
フィリピン Manila
TEL: 63-2-7320001
タイ Bangkok
TEL: 66-2-3281161-3

花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825

玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718

関山慈済病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880

大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000

台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779

台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666

斗六慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段248号
TEL: 886-5-5372000

慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)
231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770

慈済人文志業センター
112 台北市立德路 8 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989000

静思人文
TEL: 886-2-28989888

カナダ Vancouver
TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali
TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo
TEL: 55-11-55394091

イギリス London
TEL: 44-20-88699864

フランス Paris
TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg
TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam
TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg
TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna
TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng
TEL: 27-11-4503365

中国蘇州
TEL: 86-512-80990980

ベトナム Hochiminh
TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL: 95-1-541494

マレーシア
セラランゴール支部 KL
TEL: 603-62563800

ペナン支部 Penang
TEL: 604-2281013

シンガポール
TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta
TEL: 62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota
TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman
TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul
TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL: 64-9-2716976

慈濟

2024年8月20日発行・332号

中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈済基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路8号

編集 慈済日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@daaitv.com

慈済基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いに存じます。(日文組編集同人)



モザンビーク 長蛇のボランティア隊列

モザンビークのボランティアは5月5日、朝山礼拝灌仏会を行った。中部ソファラ州のメトゥシラ大愛農場で300人余りのボランティアが「3歩1拝」の動作で前に進んだ。宗教は異なっても、敬虔な心は同じだ。

各地方から来た現地ボランティアは、前の晩から大愛農場に泊まって準備し、そこで採取した木の葉で移動式の祭壇を飾り、毛布と配付した米の袋を回収して、衣装道具に使った。式典の後、経蔵劇《法華経》の「火宅喻」を演じ、大衆に仏典の中に出てくる物語の意味を説明した。近年は極端な異常気象により災害が頻繁化しており、3月末にもモザンビークの南部で甚大な水害が発生した。ボランティアは視察と配付を行い、巡礼灌仏会の場でも村人が水害被災地の無事を祈った。（文、撮影・陳宜青）



慈濟日本サイト



慈濟ものがたり